

## 論文題目

### うつ病により長期休職した男性労働者の職場復帰プロセスにおける内的な変化の理論化

## 目的

本研究の目的は、うつ病のために長期休職をした男性労働者の視点から見た職場復帰プロセスにおける内的な変化を記述し、理論化することである。

## 方法

本研究では、シンボリック相互作用論及びミード自我論を理論的前提とし、グラウンデッド・セオリーアプローチを用いて質的記述的に継続的比較分析をおこなった。研究対象者は、うつ病と診断されて1ヶ月以上の長期休職経験があり、現在復職して6ヶ月以上継続勤務ができている11名の成人男性である。分析の対象とした語りは、彼らの延べ27回の職場復帰経験で、データ収集は、2009年2月～2011年2月に半構成的インタビューを用いて行った。本研究は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て遂行した（承認番号：08-075）。

## 結果

分析の結果、うつ病により長期休職した男性労働者の職場復帰プロセスとして、【自分にとっての“普通”であろうとものがき探し求めつくり変えながら折り合っていく】という中核カテゴリと、【ここにいる価値ある自分と感じられる】【自分にとっての“普通”を脅かすものとしてのうつ病体験のわかりにくさ】という2つの副次的な中核カテゴリが抽出された。うつ病により長期休職した男性労働者の職場復帰プロセスにおける内的な変化は、男性労働者が“普通”という存在であろうと努力する中で、彼らにとっての“普通”そのものの見方・捉え方が移り変わっていくという変化のプロセスであった。内的変化のプロセスには段階があり、それは[会社人としての“普通”を保とうと頑張り続ける][会社人としての“普通”の免除申し出の意思決定を行う][会社人としての“普通”でなくなった現実から距離をおき、場を変えて病人としての“普通”であろうとする][自分にとっての“普通”に戻ろうとする][自分にとっての“普通”であることを再構造化する][他者との関わりの中で他者や自分自身と折り合いながら自分にとっての“普通”を再獲得していく]であった。また[自分にとっての“普通”であることの柔軟性の変化]は、プロセスにおいて、彼らが他者や自分自身との相互作用を通してうつ病体験を自己像に統合し、“普通”を再構造化することで生じた。この“普通”は価値評価の両義性方向への変化を表していた。そして【自分にとっての“普通”を脅かすものとしてのうつ病体験のわかりにくさ】【ここにいる価値ある自分と感じられる】は変化の移り変わりに影響していた。

## 結論

本研究の結果から、うつ病により長期休職した男性労働者の職場復帰プロセスにおける内的な変化の理論は初期の領域密着理論として示され、理論を構成するカテゴリが表す現象と、カテゴリ間の概念的な関連性を提供した。内的な変化は、うつ病に罹患し、自分の存在のありようそのものが脅かされることをきっかけに、主体的で創造的といった本来的な存在のありようをめがけ、努力し続けるなかで生じる。この変化は、他者や自分自身との相互作用を通して主体的に行われる、自我の社会性の拡大という社会化過程であると考察された。また職場復帰プロセスにおける諸問題を日本における社会・文化的な文脈のなかで捉え、うつ病の職場復帰支援における看護の実践・教育・研究への示唆を論じた。